【小学生高学年礼拝コンテンツ】

堕落論｜真の愛と偽りの愛

 皆さんは、神様がいらっしゃるのに、どうして世の中では悪いことが起こるのだろうと考えたことはないでしょうか？

創造原理で、神様が真の愛を中心としてこの宇宙を創造されたお話を聞いたのに、実際には悪いニュースをたくさん聞きます。人間も真の愛で生活すれば幸せになれるはずなのに、どうして悪いことを行ってしまうのでしょうか。

皆さんは、『聖書』のアダムとエバのお話を覚えていますか？

本来、神様がつくられた世界は善だけがあり、美しい世界でした。人間も善良で美しい心だけを持っていました。

しかし、善良に創造された最初の人間アダムとエバが、成長して完成する途中で過ちを犯し、神様の心が分からなくなり、結果的に悪い心を持つようになってしまったのです。これを「堕落」と言います。人間と神様との関係が切れてしまったということです。

それでは「堕落」はどのように起こったのでしょうか。

神様は美しいエデンの園をつくられ、最後に神様の子供としてのアダムとエバを創造されました。神様はアダムとエバが必要とするものはすべてくださり、園にあるすべての果物を食べてよいと言われました。

しかし、「善悪を知る木の実」（善悪の実）だけはとって食べてはいけない、とって食べたら死ぬと言われました。

ところが、そこに蛇が出てきて、エバを誘惑していったのです。「その実を食べても、あなたたちは死にませんよ。それを食べると、あなたたちの目は神様のように開けて、神様のようになります」と言いました。

エバは神様のみ言を忘れて、善悪の実を食べ、そのあとでアダムにも食べさせたのです。

この「蛇」とは、『聖書』を見ると、もともとは天にいたけれども地に落とされ、サタンと呼ばれているものとされています。つまり蛇の正体は霊的存在の「天使」だということです。

もともと、神様がこの宇宙を創造される前、神様の手伝いをするために最初につくられたのが、天使たちです。そして、その天使たちをまとめていたのが、天使長ルーシェルでした。神様は、いろいろなものをつくっていくうえで、一生懸命支えてくれた天使長を本当に愛していましたし、とても信頼していました。

しかし、神様がアダムとエバを創造されると、天使長ルーシェルは、自分が今まで一番愛されていたのに、自分以上に愛される存在が誕生し、とてもさみしく感じるようになったのです。

神様は、アダムとエバが生まれてからも、これまでと同じようにルーシェルを信頼していましたし、アダムとエバの教育係を任せ、ルーシェルに与えていた愛は今までと変わりませんでした。しかし、ルーシェルは、自分よりもアダムとエバが神様から、より愛されるのを見て、自分に注がれる神様からの愛が減ってしまったと感じたのです。

それを、少し難しい言葉ですが、これを「愛の減少感」と言います。

ルーシェルは、天使の世界で最も愛されていた立場だったので、アダムとエバと同じくらいの愛を人間の世界でも受けたいと願ったのです。

また、そのような中で、神様の愛を受けて育っていくエバがとても美しく見えました。そこで、ルーシェルは、神様から受けられない愛をエバに求めるようになっていったのです。

ルーシェルは、自分が神様のしもべであることを忘れ、愛に対して過分なる欲望を持ちました。そして、エバも未完成で愛が未熟だったため、時ではない時に愛について知りたがりました。そのようにしてルーシェルとエバはついにまちがった愛の関係、つまり不倫の関係をもって堕落してしまいました。

エバは、神様との大切な約束を破って堕落することで、神様が結婚相手としてつくられた相手はアダムと知って、自分の過ちに気付き、とても怖くなりました。

エバの目には堕落していないアダムがとても美しく見えました。神様のもとに帰りたかったエバでしたが、どうしたら良いか分からず、神様に相談することもなく、結果的には自分を誘惑した天使長と同じようにアダムを誘惑するようになってしまいました。アダムとエバはまだ完全に成熟していない状態だったために、時でない時に愛の関係をもってはいけませんでした。しかし、アダムとエバは神様には内緒で愛の関係を結んでしまったのです。ここから、人類の悪の歴史が始まりました。

多くの人が愛を好みますが、誤った愛に流されてしまっています。愛は、私たち自身の心の成長に伴って、成長します。子供の時にもっている愛は未熟でも、神様と共に大人へと成長して愛を成熟させてこそ、幸せな結婚・家庭を築いていくことができます。

未熟な愛とは、愛されたい、満たされたいという、要求する愛ですが、成熟した愛とは、与えたい、ために生きたいという、「他のために生きる」愛です。ルーシェルの愛は、自分のさみしい気持ちを満たしたいという、自己中心的な気持ちでエバに向かいました。相手のためではなく、自分のためにという自己中心的な気持ちが根っこにあったのです。

私たち人間には、心と体、そして愛にも成長期間があります。子供の時は「愛を得たい」「自分を満たしたい」という未熟な愛ですが、少年、青年期を経ながら心身の飛躍的な成長を遂げて、「与えたい」「誰かのために生きたい」という成熟した愛を持つようになることが神様の願いなのです。

ですから、今の時期は大切な愛の成長期間でもあるので、身勝手な愛や欲求をコントロールし、相手のために生きる愛を備えてこそ、初めて男女の愛という豊かな実を実らせることができるようになるのです。

愛の実にも「時」があり、人を愛するにも「時」があるのです。

男女の愛、それは神様の理想の中心であり、天国の出発点でもあります。男女の愛ほど人生で美しいものはありません。

しかし、愛は「時」と「方向性」を誤れば、‘地獄の出発点’にもなります。

アダムとエバは、完成するまで神様のみ言をよく守り、たくさんの愛を受けながら兄弟姉妹としての愛を成長させる必要がありました。夫婦の愛は時がくるまで守られなければならなかったのです。そして、時が来たら、神様の祝福を受けて子女を生むべきでした。しかし、時でない時に愛の関係を結ぶようになり、神様のみ旨をなせなくなりました。人をだましたり、にくんだり、争ったりすることは神様を悲しませます。しかし、神様を最も悲しませるのは、まちがった愛です。

心と体をけがさずに、きれいにたもつことを「純潔」と言います。純潔は美しく貴いものです。純潔を守り、神様の愛の心に似るように自ら努力して成長し、完成することを神様は願っておられるのです。